黒い世界

HALTA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い世界

【Ｎコード】

Ｎ１１３６Ｇ

【作者名】

ＨＡＬＴＡ

【あらすじ】

世界では、『絶明協会』が実権を握っていた。不本意ながら協会に協力する少年・影晶と協会の人間、理不尽な世界に生きる人々の物語。

1：影晶と屋久森

「影晶（エイショウ）」
俺は黙ってその声を聞いていた。
嫌いな声ではない。
寧ろ、低くて、好きな部類の声だ。
「……影晶？」
「――何だ、屋久森（ヤクモリ）？」
はぁぁ、と大袈裟な溜息を吐いて俺は問い返す。
だがまぁ、屋久森の声が聞けるなら、俺に異存は無い。
「協会から、新しい任務の依頼だ」
「協会……ってなぁ……」
あんな得体の知れないモンに、協力出来るかっつーんだよ。
……まぁ、今俺は、現に協力してやってるけどな？
「今更愚痴を言うのか」
「いやぁ確かに……俺に、協会に文句を言える権利なんて、有る筈も無いものな」
はは、と笑うと、屋久森は不思議そうな顔をする。
「真絶（シンゼツ）なら聞いてくれると思うがな」
「真絶って……協会の会長（トップ）だろうがよ。そんなお偉いさんと、俺みたいな凡人が会えるのか？」
「確かにな」
いやどっちだよ。俺は真絶に会えるのか、会えないのか？
でも、頼まれたって願い下げだ。
俺は協会には関わりたくない。
「で……新しい任務って何だよ？」
この話はこれ以上したくない。
出来れば（大好きな）屋久森を通じてだって、協会には関わりたくないんだから。

「分かっているんだろう」
「……分かりたくなんてないけどな。どうせ人殺しだろ」
「人殺しとは随分人聞きの悪い言い方だな」
「人を殺すのに、人聞きが良いも悪いもあるかよ。普通だったら俺、今頃死んでるぜ」
それだけ協会の力が凄いって事なんだけどな。
「命だけは守られている」
「命だけだろ？　おかげで今の俺には、プライバシーも何もあったもんじゃないぜ」
とか言っているのも、全て協会には筒抜けだ。
でも、協会に『影晶（おれ）を殺す』という選択肢は無い。
だから良いんだ。何言っても。
「詳しい話は、協会から直接人が来るそうだ」
「はぁ！？」
屋久森の放った言葉に、俺は驚きを隠せない。
「何でだよ！　俺、あれだけ協会の奴には会いたくねーっつったのに！！」
「私も一応協会の人間だぞ？」
「屋久森はちげーよ。俺の中ではな。協会の奴ってのは、もっと、こう……」
そう言った瞬間、不意に部屋の扉が開く。……何でノックしないんだよ。
大体、俺の部屋に出入りしていいのは、俺と屋久森だけの筈だけど……？
「お初にお目にかかります、影晶様」
「誰だよお前」
「申し遅れました。私は、雷無（ライム）と申します」
雷無……雷無って！
「お前、協会の人間だろ。名前を良く聞く」
「はい」

通称『風切りの雷無』。
極悪非道と言われ、協会で最も残酷な男……。
「屋久森、席を外してくれるか。これは私と真絶様と影晶様にしか知らせたくない」
「分かりました」
屋久森は敬語を使い、あっさりと引き下がる。
何だ……こいつ、何者なんだ……？
「影晶様、屋久森から、私から任務の内容をお話しするという事はお聞きになりましたか？」
「……まぁな」
「そうですか。それなら良かった。……影晶様にお願いしたい任務は、重役に幕を下ろす事です」
パタンと扉がしっかり閉まったのを確認した後、雷無は言う。
「其れってつまり、殺すって事だろ」
「そういう事で御座いますね」
顔色一つ変えず、俺の方を見もせず言葉を放った。
「何でそんな重要な事を、俺に頼むんだよ？」
「協会と密接に関係しておりますので、協会内部の人間には頼めないのです」
自分達は手を汚したくない、という気持ちが手に取るように分かる。
「身内の事は身内で片つけろよ。俺は協会とは、出来るだけ関わりたくないんだ」
承知の上です、と雷無は続ける。
「ですから影晶様に、頼むのです」
「はぁ……？」
雷無のその表情からは、『楽しそうだ』という事しか見受けられなかった。

2：影晶と屋久森（2）

「何て顔をしてるんだ、影晶」
「何て顔ったって、これが俺の元々の顔なんだから、仕方ないだろ？」
「いや、そういう意味じゃない」
そう言って、屋久森は俺の頬を引っ張る。
俺の大好きな低音で喋って、しかもこんな事してくるんだから、屋久森は俺に気があるんじゃないかと思う。
……え？　いや、其れは只の妄想。
実際、屋久森には婚約者が居る。
「27歳だしな……」
「？　何か言ったか」
「いや別に」
しかし何を隠そう、屋久森は27歳なのだ。
今年の11月3日――あと丁度1ヶ月だ――で28歳になるとはいえ。
あ、参考までに、俺は16な。
「其れにしてもなぁ……何で協会のことを、俺がやんなきゃいけないんだよ」
「……すまない」
「何で屋久森が謝るんだよ？」
「私も協会の人間の1人だからだ」
「……」
――屋久森にはそんな事、言ってほしくなかった。
屋久森が協会の人間だなんて、俺はそんな事は信じたくなかった。
大体協会の人間ってのは……もっと、こう……。
「影晶様、準備は出来ましたでしょうか？」
「だーっ！！　雷無、てめぇ！！」

雷無はいつも空気が読めないから困る。
てか昨日会ったばかりだし、空気じゃなくて気配だったし。
「……お前、協会の事悪く言われるの嫌なんだな？」
「其れは、まぁ……」
ほらみろ。こいつはこういう奴だ。だから協会なんて嫌なんだ！
――だが、今更協会に執着なんてないですけどね、と雷無が呟いたと思ったのは俺の気のせいだろうか。
「で、俺はもう出発して良いのかよ？」
「１０秒以内に片を付けられるのだったら、どうぞ出発なさって下さい」
「……俺の事馬鹿にしてんのか？」
どこの世界に、１０秒で１００人以上の男を全滅させられる奴が居るんだよ。
大体入って出てくるだけで、１０秒なんて経つだろうが……。
「いいえ。私どもは影晶様のお力は、良く分かっておりますので」
「もう良い。お前と話すのは疲れた」
只の嫌味としか思えない。
「其れでは、申し訳有りませんが、もう少しお待ち下さいませ。準備の方が、滞っている様で御座いますので……」
何やってんだよ。俺は苛々しながら毒づいた。
「影晶、雷無様にあたるな。雷無様だって、お前を待たせたくて待たせているわけじゃないんだから」
「……ふん」
屋久森まで雷無（コイツ）の味方かよ。面白くない。
「当たり前だろ。待たせたくて待たせてるんだったら殴ってるぜ」
「影晶！」
「ふんだっ」
あぁ駄目だ。こんな俺は、俺だって好きじゃない。
屋久森を困らせたい訳でも怒らせたい訳でも何でもなくて。
ただ俺は、屋久森には、俺を見ていてほしくて。

この押し込められた世界で、せめて仲間だと思っていたくて。
「影晶様、申し訳御座いません」
「五月蠅いっ！　お前は喋んなくて良いっての！！」
嫌だ。嫌だ嫌だ。
どうしてこんな奴の事を、屋久森は『様』付けで呼ぶのだろう？
俺なんか頼まれても土下座されても何でもするって言われても、絶対嫌だね。
虫唾が走る。気持ち悪いっ。
「影晶……」
「五月蠅い……屋久森も喋んな」
喋るんだったら準備でも手伝ってこいよ馬鹿。
俺は顔を自分の腕の中に埋めた儘、そう言った。
「屋久森、折角だから影晶様のお言葉に甘えさせてもらおうか」
「……影晶、１人で良いのか？」
「五月蠅いっつってんだろ！　どっか行くんなら、さっさと行けよ！！」
顔を上げずに精一杯の声で叫ぶ。
駄目だ。今顔を上げたら、きっと涙が止まらなくなるだろう。
だから早く行け。こんな顔、死んでも見せられないから。
「影晶様、直ぐに戻って参りますので」
雷無は最後にそう言い、パタンという扉の音と同時に部屋は静寂に支配された。
でも其れで良いんだ。
今は誰かの声なんて聞きたくない。
「屋久森……馬鹿ぁ……」
……本当に行く奴が、どこに居るんだよ。
涙は堪え切れず、俺の頬を伝って落ちた。

第2話：俺と協会、屋久森

協会なんて大っ嫌いだ、なんて協会に保護されてちゃ、そんな事も言えない。
真絶っていうのは、実は良く知っている。屋久森には言ったことないけど、会ったこともある。
でも、嫌いだ。嫌いなんだ。
協会は、俺から全てを奪ったから。

「馬鹿……っ」
本当に行く奴があるかよ。屋久森っ。
でも1人になりたかったのも事実、俺は矛盾した思いを抱えてベッドの上で体育座りをする。
雷無が居なくなって良かった。
でも、屋久森も居なくなってしまった。
「どうして屋久森は、協会の人間なんだろ……」
屋久森が協会の人間だなんて、考えられない。
協会の人間っていうのは、もっとこう、悪そうな奴だから。雷無なんかがそうだな。……あ、真絶もそうか。
あいつ――雷無はよく分からないけど、でも悪い奴だと思う。
噂からの先入観かもしれなくても、でも俺は嫌いだ。
協会の人間だから。
「屋久森が協会の人間だなんて、信じられねーよ」
信じたくない、というのが本音だろうが。
其れでも嫌なんだ。
だって屋久森は、あんなに良い人なのに。
「……待て、屋久森は本当にいい奴か？」

俺には優しいさ、そりゃ。俺は協会にとって必要だから。
――もしかしたら、屋久森は協会の人間だから優しいのかも。
本当はどう思ってるかなんて、そんなの知らないけどな？
「偽善……かな」
例えば、弱い奴を庇い安心するように。
雷無を見ていると本当は屋久森、俺に関わりたくないんじゃないかって思うんだ。
だって雷無と喋っている時の方が嬉しそうな顔するんだもん。……何話してるか知らないけど。
「嫌だな、偽善者だったら」
もしも、屋久森のあの優しさが、上辺だけだったら……なんて。
想像するだけで恐ろしい。悲しすぎるだろ？　そんなの。
だって俺には、屋久森しか頼る人がいないのに。
「屋久森……屋久森っ、馬鹿……っ！」
どうしてお前は協会の人間なんだよ。
俺は協会の人間なんて、大っ嫌いなのに。
でも俺は、お前の事好きなんだ。
協会の人間でも。

協会を好きになれる気はしないから。
だからせめて、協会の人間とは何とか仲良くなろうと思っていたのは、２年前までの俺。
でも今俺は、１６歳。今までとは全然考え方が違う。
駄目だ。協会の人間とは絶対に仲良くなれない。
ってか、仲良くなんてしたくねーよ！！

心の中で叫んだ瞬間、不意に扉が開いた。

第3話：仲間？　違う、仲間なんて居やしない（前書き）

俺には仲間なんて居ない。
いや、仲間なんて要らないさ。
所詮裏切られるだけなんだから。

第3話：仲間？　違う、仲間なんて居やしない

「影晶様、遅くなって申し訳御座いません。準備が整いました」
「っ、遅いんだよ！」
「申し訳御座いません」
潤みかけた目頭を押さえ俺は雷無に叫ぶ。
屋久森の顔は見なかった事にした。
「こちらへどうぞ、影晶様」
「……名前を呼ぶな。お前に俺の名前は呼んで欲しくない」
「畏まりました。ならば何とお呼びすれば宜しいでしょう？」
「～……っ」
雷無は屋久森がこちらを見ていないのを良い事に、意地悪く笑って見せる。
俺はそんな雷無に心底腹が立った。
「ら・い・む～……っ！」
「宜しいのなら、『影晶様』と呼ばせて頂きますね」
さらりと俺の怒りをかわし、先に歩いていく雷無。
こちらですと案内するフリは、俺を避けている証拠。
屋久森すら俺の顔を見なかった。
「影晶様、こちらで今日の任務の作戦について説明されます」
軽く無視。
扉を押して先に入った。
「影晶！」
ギィ。
屋久森の制止の声も聞かない、勿論。
何かもう、全部どうでも良くなった。
２人で居たいんなら居ればと開き直ってる。
近付いてこないんなら、何でも良い。そう思った。
「おっと少年、こんな所でどうした？」

「……少年じゃない」
少年だろう、とその赤い髪の男は笑ったので、苛立って俺は名前を言ってしまった。
「影晶！」
「……そうか、お前が影晶か」
其処はとても広い会議室。
縦長のテーブルが２つ置かれ、向かい合う様にして沢山の椅子が置かれていた。
それの一番扉側の右に座っている男が、俺に声を掛けてくる。
「宜しくな、影晶」
「……お前、協会の人間なんだろ」
差し出された手を払い除ける事すらせず、俺は訊いた。
「そうだ」
「じゃあ、握手なんてしない。名前も聞きたくない。今後一切俺に話しかけるな」
冷たく言い放ち、俺はその男と一番遠い席に座る。
屋久森が早足でこちらに近付いてきた。
「影晶、協会嫌いもいい加減にしろ」
「何でだよ。俺から奪ったのは協会の方だろ？」
「……協会の人間が、全て同じだとは思わない方が良い。彼も協会を憎む１人だ」
「……は？」
思わず屋久森の目を見て問い返す。
「彼の名は『緋向（ひむか）』」
「緋向……」
聞いた事のない名前だな。
「協会を憎むって……それ、どういう意味だよ？」
「そのままの意味だ。……私からは言えない」
協会の人間だからか。
随所に散りばめられたその破片が、俺の胸を突き刺す。

「あー、はいはい、屋久森は協会の人間だからな。俺が自分で訊いてきますよっと」
雷無は既に、俺の席の隣の隣に座っていた。
屋久森は俺の席と雷無の席の間の席に腰を下ろす。
緋向はといえば、俺が歩いてくるのを面白そうに笑みを浮かべ、黙って見ていた。
「影晶、どうした？　心変わりか」
「緋向」
名前を呼ぶと、緋向は一転、真剣な顔をする。
「……協会を憎んでるって、本当か？」
俺の問いには答えなかった。
代わりに、目で告げている。
『そうだ』
俺は軽く頷いた。
「でも……何故、そんな事を？」
「多分、お前と同じ理由さ」
安心させる為にそんな事を言ったのか？　俺と同じ理由なら協会の人間である筈はない。
それに緋向が、俺が協会を嫌っている理由を知る筈がない――けれど。
「ふーん、そうかよ……じゃ、味方（ナカマ）って事か」
仲間？
緋向はククッと喉の奥で笑った。
「それならきっと、そういう事なんだろうな。お前が俺を仲間だと思うなら、きっと仲間なんだろう」
「……何だよ、それ」
まるで、他人（ヒト）の助けを必要としていないかのようで。
「……でも、仲間なんて、俺には要らないさ。俺は1人で生きる」
それだけだ。
俺は言い切ると立ち上がり、足早にそこを立ち去る。

……カチンときて、ついそう言ってしまった。
でも、馬鹿だった。人に頼ろうとした俺が甘かった。
この戦いは所詮、独りの戦いなのに。
「何か話したのか？　影晶」
「……別に」
これは俺独りの戦い。誰にも背は預けない。
それは勿論、任務の時も。
「……絶対に、負けない」
協会なんかには負けない。絶対に。
俺は強く拳を握り、そう誓った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1136g/

黒い世界

2011年10月5日18時53分発行